

の圧力に起因する上述のごとき空間・時間意識の「ねじれ」が発生していた点を充分には認識していなかったこと。第二にはこの意識の「ねじれ」は毛沢東の中国が「欧米近代」に対して「戦争と革命の勝利」を確信していたがために「敗北を自覚しつつ、なおかつその敗北に抵抗する」という「掙扎」（抵抗の持続）を保持し得なかったことに起因する点を認識しなかったこと。この二点に尽きる。

しかし認識上のこうした欠落は、本来、竹内がすでに提起していた思考の枠組みを徹底していれば克服しえたかもしれない性格のものである。実際、竹内と異なって60年代から70年代にかけて、毛沢東の中国を批判的に見ていた人々も、決して上述の空間・時間の「ねじれ」や「勝利の確信が敗北の無自覚」の事実とその重要性などを認識していたわけではなかった。

ところで、毛沢東の中国と対抗して提起された1960年代前半の劉・鄧による調整政策、さらに文化大革命の否定後、毛沢東の中国にとって代わって登場した79年以後の鄧小平の「改革開放」政策は、いずれも「自己実現と自己拡張」を続ける「欧米近代」の圧力を前にして、「自己の敗北」を自覚するものの、むしろそれへの「掙扎」（抵抗）を放棄して、「欧米近代」の「自己拡張」の流れにみずから同化する政策にほかならなかった。つまりそれは明治近代以後、今日に至るまで「欧化」の道をひた走った日本の「近代」とほとんど同質の「自己喪失」の過程を不可避的に歩むものだった。

まとめて言えば、毛沢東の中国は「欧米近代」に対する「自己の敗北」を自覚しないがために、「掙扎」を忘却し、鄧小平の中国は「自己の敗北」を自覚するがゆえに、「掙扎」を放棄したということである。いずれも「掙扎」をくぐらないという意味では、結果として固有な「伝統」を失う方向に道を開く傾向を孕んだのである。

[X]

「掙扎」と「訣別」と

「欧米近代」の「自己実現、自己拡張」の文明的な力学は、1970年代半ばを過ぎると、ほとんどその行く道をさえぎるものがないほどの勢いとなる。とりわけアジア地域においてその傾向は顕著なものがあつた。1970年代、アジアには韓国、香港、台湾、シンガポールの新興工業化諸国地域(NIEs)が台頭し、さらに80年代から90年代前半にかけてはASEAN(東南アジア諸国連合)がNIEsを追いかけ、さらに中国の驚異的な高度成長がそのあとに続いた。70年代半ばNIEsの経済的な台頭が明らかになると同時に、小島清はこれを「雁行型発展」として理論化し、その後のアジアの発展を予測したが、以来、「アジアの世紀、アジアの時代」の到来が言われるほどになった⁶⁴。

松本健一報告はこのような変化を評して、かつて1960年代までのアジアは貧困、停滞そして非民主といったマイナス・イメージでとらえられていたが、1980年代になると経済発展とそれを支える活気、さらには非民主から民主へ、といったプラス・イメージに大きく変化したと述べた⁶⁵。

しかし松本が、アジアがプラス・イメージに変化したという70年代後半から80年代は、現実には雁行型発展の先頭を行く日本を初めとして、アジア地域に広く「無思想の時代」が到来した時期に当たっている。それはむしろ物質的な「豊かさ」と引き換えに、「等身大」の世界が見失われイノチのありかが見出せなくなる、「日暮れてゆく道のない」時代とも言えたのである。

それに比べて松本が貧困と停滞、非民主などマイナス・イメージで形容した50年代から60年代のアジアには、明らかに「欧米近代」の「自己拡張」の圧力に抵抗しようとする有力な「思想潮流」が存在した。とりわけ1955年4月のアジア・アフ

リカ会議（バンドン会議）は象徴的な意味を持った。同会議の「共同宣言」は次のように言う。

「かつて野蛮な外国の野獣が野や森をのし歩いたアジア・アフリカは、もはや国際社会の未来にとって決定的な役割を演ずる自由にして尊敬さるべき勢力となった。……バンドンで打ち鳴らされたアジア・アフリカの夜明けを告げる鐘は、幾百年にわたる屈辱の生活から、17億の人々を呼び覚ましたのだ」⁶⁶。

確かに当時アジア・アフリカはなお貧困の中にあった。しかし同時にその時代はアジア・アフリカが百年余にわたったヨーロッパ列強諸国による暗黒の植民地支配を打破して次々に独立を遂げる時代でもあった。それゆえアジア・アフリカ世界の内側の視点から見た場合、50年代から70年代前半にかけてのアジア・アフリカは「夜明け」の時代であり、マイナス・イメージではあり得なかった。

アルジェリア革命にその後半生を捧げたフランツ・ファノンが1961年の死の直前に、「ヨーロッパの夢との訣別、たえず人間を語ってやまなかったヨーロッパとの訣別」を謳った⁶⁷。ファノンのようなアジア・アフリカ・ラテンアメリカ（以下、A・A・LA と略）世界の進歩的知性にとって、ヨーロッパは帝国主義をもたらした憎むべき敵でありながら、同時に人類史の進歩を測る決定的基準でもあり、「夢」でもあった。それゆえにそこには常にヨーロッパに対し一方で「抵抗」しつつ、他方で「期待しては裏切られる」という繰り返しがあり、その反復の中でA・A・LA世界の人々は絶えずヨーロッパに対する「抵抗の牙」を抜かれ続けてきたのである。ファノンの宣言は、そうした期待と裏切りの反復に終止符を打つことを主張したものである。しかしこの「訣別宣言」は同時に、「ヨーロッパ近代」に対する「敗北」からの脱却がアジアにとって可能であるという確信なしに生まれ得ない性格のものだった。

ファノンの宣言には、こうして毛沢東の中国と

ほとんど同質の「敗北の自覚」の欠落が生じることになったが、むしろそれゆえにこそ60年代を通じて、A・A・LA世界に共通した旋律となって響き渡っただけでなく、欧米世界の内部にもたとえばアメリカの黒人公民権運動などにマルコムXやカー・マイケルのような多くの共感者を生み出したのである。さらにサミール・アミンやA・G・フランクらの従属理論も、A・A・LA世界が「欧米近代」の「自己拡張」の原理である世界資本主義の枠内にとどまる限り、加速的な従属化の圧力を免れ得ないと主張したが、それゆえに究極においてやはり「ヨーロッパとの訣別」によってこそ従属化の運命から脱することができる主張するものと言えた⁶⁸。こうして「ヨーロッパとの訣別」の思想は、A・A・LA世界のみならず欧米世界の一部に「反欧米近代」あるいは「超近代」の思想潮流を作り出す上で一時、大きな共鳴作用を果たしたのである。1940年代から50年代にかけてのマルクーゼの「拒絶の思想」やフロイト左派のW・ライヒの「自己否定」（自我の鎧の否定）などが、60年代にカリスマ的ともいえる大きな影響力を持って再評価されたのも、同様の背景からだった⁶⁹。

竹内好の「近代の超克」や「方法としてのアジア」が、あたかもファノンの「訣別」とほぼ同じ時期の1960年前後に登場し、日本の思想界に大きな波紋を呼んだのは決して偶然ではなかった⁷⁰。むろん竹内の思想の核には「欧米近代」に対する「掙扎」（抵抗）の方法があり、ファノンの「訣別」やマルクーゼの「拒絶」とはその意味を異にする。しかし「掙扎」と「訣別」の間の違いは紙一重だった。なぜなら「訣別」もその前段に「抵抗」を伴わないわけではないからである。「抵抗」と「期待」と「裏切り」と、その反復と交錯による挫折こそが、最終的に「訣別」を決意させたのである。

ところで「掙扎」もまた「欧米近代」に対する一切の「期待」を抱かないという意味では、「訣別」

と変わるところはなかった。「訣別」も「掙扎」も、ともにアジアがヨーロッパの「ドレイ」になることを克服する道にほかならなかったのである。両者の違いは、「訣別」が「期待」の放棄と同時にヨーロッパに対する「抵抗」ではなくて、「絶対的な拒絶、絶対的な対決」の道を選ぶのに対し、「掙扎」はあくまで「敗北の自覚の上に立った抵抗の持続」を求める点にあった。つまり「掙扎」は「訣別」と違って、あくまで「欧米近代」の枠組みにとどまって、「抵抗を持続する」方法だったのである。

60年代以後の竹内好は、私の目には一方の足を「掙扎」の方に置きながら、もう一方の足を「訣別」の方に置いていたように見える。竹内が1940年代前半の戦前日本の「近代の超克」論議に、1959年の時点で再考の価値を見たのは、その一つの表れだったろう。この点は、むしろ「日本ナショナリズム」の問題と深く関係している。以下、本論の最後にこの問題を議論して、竹内好再考の現代的意義についてのまとめをしたい。

[XI]

むすび：「日本ナショナリズム」のゆくえ ——「有根」と「無根」と——

1972年7月田中角栄政権の登場とともに打ち出された「日本列島改造」論は、60年代まで日本社会が抱えていた公害、過疎、二重構造などの諸矛盾を一挙に解決するデザインとして、新幹線網や高速道路網、大規模ベッドタウン建設などインフラ公共投資主導の津波のような政策によってこの社会を一変させた。竹内は1951年の「国民文学論争」の提起以来、「欧米近代」に対する「掙扎」の波を起こすことで戦後日本の「再生」を期待し、またその「再生」の中から「日本ナショナリズム」の新たな「生成」を展望していたが、その期待と展望は、70年代前半の「列島改造」の

建設投資ラッシュの大音響の中で掻き消される結果となった。

同様に60年代まで日本社会を覆っていた「戦後日本近代」に対する批判、「反欧米近代」や「超近代」の思潮と運動は、1970年を境に「70年安保」の終焉、「全共闘運動」の解体、さらには「連合赤軍事件」などによって急激に退潮し、そのあとには「思想の冬」、もっと言えば「無思想」の時代が到来したのである。

これを後押ししたのが1972年の米中和解と日中国交正常化、戦後世界にパックス・アメリカナとして君臨してきた米国に一貫して非妥協的に対決してきた中国が、突如その対決姿勢を撤回し握手したこと。さらに1975年のベトナム戦争の終結、1978年に始まるベトナムのカンボジア侵攻、そしてポル・ポトの虐殺と中国文化大革命の真相の暴露などが、一連のアジア・イメージの落日と暗転を生むきっかけとなった。

このアジア・イメージの落日は、むしろ松本健一報告が言うように、反面ではNIEsの経済的台頭と「富裕化」という、反面現象としての「アジアの台頭」を生んでいた。しかし、それはアジアが「欧米近代」に対するみずからの文明的「敗北」を受け容れ、「抵抗」も「訣別」も、どちらも放棄することによって、竹内的に言えば「自己を喪失する」ことを代価として獲得した物質的「果実」にほかならなかった。

こうした中で、中尾佐助や上山春平などによって60年代から提唱されていた「日本照葉樹林文化論」⁷¹が、70年代後半以後、徐々に再評価されるようになり、80年代に入ると青木保らが国際化の中での「日本の台頭」を意識しつつ、これがかつての「近代の超克」論と半ば結び付け、「欧米近代文化」と異なる日本近代文化固有論として再提起しようとする動きを見せたりもした。

このような動きは、ある意味では1940年代前半の京都学派が、明治近代以来の物質的近代化の成功による「日本の台頭」を前提として、「近代